
異世界で英雄

ジック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で英雄

【Nコード】

N4719L

【作者名】

ジック

【あらすじ】

俺の名前は桜舞希さくらまじき

交通事故で死んだ俺は生き帰ることができるという条件「世界を救う」為に異世界に旅だったんだ。

だってさっきまで誰もいなかった俺の後ろから声が聞こえるんだぞ
心臓とか大事なものが口から出かけたわ

『すみません、脅かしてしまったようで。私はラファエルといいま
す。この地獄への案内人をさせても らっています。』

恐る恐る後ろを後ろを振り向くとそこには俺が女なら確実に惚れる
であろう超絶イケメンが立っていた

ある部分を除けば人間と間違えるであろう…… だけど確実に人間に
はないものが付いている

それは…… 黒い翼だ

「お、俺は死んだのか？」

『はい貴方はもう死んでいます。さっそく地獄に連れて行くのかと
思うんですけど、まず貴方に謝らなければならないことがあります』

何？俺は地獄の案内人に謝られるようなことしたの？

『いえそうではなくて、私がしてしまったのです。』

「……もしかして俺の心が見えるとか？」

そう俺はさっき言葉にしていけないのに、このラファエルさんとやら
は俺の聞きたいことの答えをいつてきたのだ

『はい。人間の心を読む程度の事でしたら簡単ですよ』

何だと…… まずい早く煩惱を消さなければ

ああそんな事考えてるとあんな事やこんな事を思いだしてしまうっ

少し嫌みっぽい言い方になったが、気にしてはいられない。やつぱ自分が大事だからな

『はい。地獄のルールでは世界を救ったものは、一度だけ人の死を無かったことができるのです。それは寿命を迎えてしまつと無効なのですが、貴方はまだ寿命を迎えていません。なので今から世界を救えば生き返ることはできます。貴方にもしその気があるのならば、貴方が死んでしまった責任は私にありますので全力でサポートさせていただきますが……。』

「なるほど、全く分からんことがわかつたぞ」

ちよつと長すぎて途中から分からなくなつた

『つまり世界を救つゝ生き帰れるゝいやっほういつてことです』
なんか最後の方でキャラ崩壊してた気がするがそこはスルーしておこう

「じゃあ俺は生き帰れるのか!？」

『はい。あなたが世界さえ救う事が出来たら生き帰る事が出来ますよ』

なんか、もう嬉しすぎてこいつのせいで死んだことも忘れられそうだった

「わかつた。んで俺はどうすればいいんだ?世界をを救うことなんてどうやってするんだ?戦争でもとめるのか?」

正直、平和な日本で生まれ育つた俺にはそれぐらいしか、思いつか

なかった。

『いえ、貴方には地球ではない、魔王が世界を支配している世界を救ってもらいます。』

「ええ！！！！！？？？？？？？？？？？？そんなの無理だつて！！魔王だろ！！倒すんだろ！！無理無理無理無理！！！！出来るわけがないじゃんか！！馬鹿じゃないの！！！！？」

一般人の俺がそんな世界を支配できるような魔王なんかには勝てる気がしない。戦う気すら起きない……

『安心してください。そこは私が貴方の身体能力を底上げしておきます。これで、多少は戦うことが楽になるはずですよ。さらに、その魔王の試合している世界では魔法というものが存在するのですが、これは使えるようにしておきましょうか？』

身体能力の底上げか……。力が強くなったりするのだろうか？

「先に魔法の説明をしてくれないか？」

俺は魔法なんぞ、RPGの世界でしか知らないからな……。それと同じようならやりやすいんだが……

『わかりました。』

多分あった方がいいとは思うのだけど、一応説明してもらおう。なんかデメリットがあったらいやだし。

『魔法には、それぞれ属性というものがあります。基本は炎、水、氷、雷、風、土の6種類ですが、光や闇といったような特殊な魔法もあります。光や闇は威力が半端ないぶん、習得が大変難しく、しかもすさまじく集中力をつかってしまいます。ちなみに魔法を使うための力を魔力といい、これは魔法を使うたびに消費していきますが、基本的には1日程度回復します。ただ魔力が無くなったのに魔法を使ったりすると暴走するので気を付けてください。』

なるほど、炎、水、氷、雷、風、土、光、闇……か
どれも、ゲームでよく出てくる種類のものだった。

「デメリットとかあるのか？」

『さきほども言いましたが、魔力が切れている状態で魔法を無理に使うと暴走状態になります。暴走状態になると、貴方の中のリミッタが外れ、自我をなくし、手当たり次第に人殺す狂暴な獣になってしまいます。これさえ気をつければ、特に問題はないかと。』

暴走か……。こええな。

「わかった、その魔法も使えるようにしてくれ。」

『了解しました。では何属性の魔法にしますか？』

これは迷うな……。俺、注文とかでもかなり迷ってしまうタイプだし……。
とりあえず俺は、魔王を倒すための勇者らしい属性を選んだ。

「光でよろしくたのむ。」

『了解しました。では、こっちについてきてください』

そういつてラファエルは奥の方に消えていった

俺は言われるがままにラファエルについて行った。

『ここです』

目の前には小さな扉が一つあった

『この扉をあけると貴方はここでも、地球でもない異世界に飛んでいくことになります。』

この扉の向こうには魔王が支配している世界があるってわけか……。つかここも俺にとっちゃすでに異世界なんだけどね。とそこで一つ疑問がわいてきた。

「あのさ、質問なんだけど、もしあっちの世界で死んじゃったりしたらどうなるの?」

『またここに戻ってきますよ。ただしもう二度と挑戦することはできません。言い忘れてましたが、向こうの世界には特殊能力というものが存在します。これは魔法を使うことのできない人にも魔法が使える人にもあります。恐らく向こうの世界にたどりついた瞬間に貴方にも特殊能力がつくと思います。私にはどんな能力なのかはわからないので、すみませんが、自分で見つけ出してください』

特殊能力か、これは魔法同様に魔王を倒すための鍵となりそうだ。

『では、どうぞ「無事で」』

俺は目の前の小さな扉を眺めて、地球のそのことを思い出していた。家族の事、友達の事、学校の事、さまざまなことを思い出しながら俺は誓った。

「絶対に生き帰ってやるからな……」

俺は目の前にある扉を開けた

その瞬間ひどいめまいに襲われ意識が……途絶えた

だいぶ前に意識が戻ったのだが、時間が分からないので、それが1日たったと言われても、30秒しかたっていないよと言われても、俺には判断する事ができない。体が全く動かなくて、腕も上がらないし、口も動かない。多分感覚神経が狂ってしまったのだろう。

「！」

そんなことを考えていると、突然激痛が走った。だが声がでない。激しい痛みに耐えきれず、俺は、もう一度意識を失った。

第1話 俺が世界を救う(後書き)

ご感想・ご意見・各種批評・間違いの御指摘などをお待ちしております。

第2話 コンテニューはできません

目が覚めたら全く知らないところにいたっていう経験はありますか？
俺は今、俺のじゃない、かなり豪華なベットのの上にいます。

「すーすー」

後、一緒に俺と同じ年くらいの女の子が寝てます。しかもこれが美少女。

その女の子の上にギリギリ触れるか触れないかのところで覆いかぶさってる俺は、体がまだ動きません。これではただの変態ですね。
このまま、彼女が起きなければいいのだけど……。つかなんで体が動かないんだよ、しかも女の子の上で……。

「あれ？」

体が動く。手を動かさそうとしてみたら動いた。
本来なら、ひとしきり喜んだあとで、ここを脱出するんだけど、喜ぶことすらできなかった。なぜなら

「ん〜？」

勢いあまって、俺の手が彼女に当たってしまったのだ。しかも最悪なことになんか俺の手は彼女の胸の上にある。なんか俺の意思に関係なく、指が動いてしまっている。
確実に起きた。しかも目があった。

「あばばばばば」

時間が止まるというのはまさにこのことを言うんだな……。目が合
つてから、彼女が動き出すまで約3秒。その時間がとてもスローに
見えた。スローすぎて、彼女が剣を握ったように見える。

……あれ？剣……？

「じふっ！」

いきなりおなかを蹴られた。腹の中の空気が全て吐き出される。気
持ち悪い。

「なにしゃがる!?!」

「あ、あ、あ、貴方こそ私の部屋でなにをしてるんです!?!という
か何者です!?!」

気が付いたらここにいて、あなたの胸揉んでました。なんて言えな
い。

「え〜と、実はこの世界を救いにきた勇者なんですよ」

これは事実だ。できるかどうかは別として、俺は本当にこの世界を
救いにきた。まあ客観的に見たらただの頭のおかしい人なんだけど、
今の俺はいろいろパニックになって、そんなことまで考えが及ば
ない。

「は？」

いままで、真っ赤に染まっていた彼女の顔は、なにか痛い子でも見
るような顔になって、俺を見てきた。

「な、なんだよー」

べ、別にそこまで引くことないだろう。ただ、世界を救いに来たって言ってるだけなんだから。

どう見ても変人です。本当にありがとうございました。

「いや、自分で自分こと勇者とかいっちゅう人がこの世に存在するのかわかっています。」

「ぐっ」

確かに、事情を知らない人が聞いたら、ただの痛い子だな。でも事実なんだもん。

「勇者様なら、もう容赦はしなくてよさそうですね。」

「え？」

いつの間にか彼女は剣を構えている。

「待ってくれ！本当にわざとじゃないんだ。信じてくれ。」

そう、これは本当に真実だ。俺は決して、わざと胸をさわったりしていない。あれは自然の流れというか、神の意志というか、そういう漠然としたもののせいなんだ。揉んでしまったのも俺が童貞だったからで、俺がわるいんじゃない。社会が悪いんだ。

「人にものを頼む時の態度がなってませんね。来世では頑張ってください。」

「誠に申し訳ありません。しかし、本当にわざとでやったのではありません。信じてください。」

俺は思いつく限りできるだけ丁寧に謝りつつ弁明した。

すると彼女はため息を突きつつも話を聞いてくれたみたいだ。

「わかりました。一応信じますよ。」

「本当か!？」

以外にもすんなり信じてくれた。いきなり殺そうとして来たりするけど、案外いい人なのかもな……。

「しかし、私の体を弄んだ代償は償ってもらいます。」

「弄んだって……え?」

その瞬間、早すぎて見えない斬撃が俺を襲った。

それは常人の俺なら、反応すらできないスピードだった。

そう、常人の俺なら……だ。

「よっど。」

「!」

今の俺は、ラファエルから、身体能力の底上げをしてもらっている。

これでも、魔王を倒すためにきてるんだ。人間の、それも女の子の剣なんて避けられないわけがない。

「くっ、変態の癖にやりますね。」

「その変態っていうのやめてくれないか？」

ちよつと傷ついちゃうぜ。同世代の女の子に変態って呼ばれるのは……。

「不法侵入に婦女暴行罪、どっからどうみても、変態じゃないですか。」

「……………」

やべ、反論できねえ。

「でも、わざとじゃないんだぜ？」

「そうやって、なんでも、わざとじゃない、俺のせいじゃないって言って逃げる人は、私の2番目に嫌いな人種です。たとえ本当に自分のせいじゃなくて、他の人のミスだったとしても、それをかばってあげるくらいの器の大きい人になりなさい。」

「……………」

この子の言つとおりだ。俺は、全部の責任をラファエルに押しつけようとしていた。それで、自分の事を正当化しようとした自分は確かにいた。ここにきてしまったのは、確かに俺のせいじゃないけど、彼女の胸を揉んで、怒らせてしまったのは、確かにここにいる俺自

身だ。

「わかるかった。確かに俺は、人のせいにして自分を正当化しようとしてた。」

「……ふ、わかればいいんですよ。」

ふうこれでなんとか一件落着かな……。

「では、死んでください。」

今度の斬撃は、油断していたのと、さっきよりも速さがあつたせいで、反応できなかった。

「ぐはっ」

俺は、こんなところで死ぬのか。俺を切った彼女の姿がぼんやりと見える。彼女は、ベットに戻っていく

ようだ。くそ、あと少しあと少しなのに……。

あと少しでパンツが見えそうなのに……。

このまま見えないのかと思っていたが、彼女がベットに座った瞬間、

「見えた！」

彼女は一瞬、首をかしげたがすぐ気がついたようで、顔を真っ赤にしながら、俺にとどめをさした。

我が生涯に悔いなし

第2話 コンテニューはできません(後書き)

何ヶ月振りだろう…。更新するのは。

ご感想・ご意見・各種批評・間違いの御指摘などをありましたら、コメントお願いします。

第3話 勇者様（笑）

結論から言うと俺死んではいなかった。聞くところによると、彼女が切ったのは刃ではないところ、いわゆる峰打ちという奴で俺は気絶させられたのだ。

「……………いてえな」

まだかなり痛む。峰打ちと言ってもかなり痛い。どれ位痛いかというのと、あ、俺死んだわ……………と思えるレベルである。

あ、そうそう実は俺、今すごいところにいるんです。どこだか分ります？

牢屋ですよ。しかもまだ彼女の家（実はお城）の中に牢屋があったんです。さつき看守さんに聞いた（かなり俺と会話することをいやがってた）んだけど、ここは、この世界、ガイアっていうらしいんだけど、その中でもかなり発展した街で、カーテベルっていうらしい。んで、俺が今いる場所はカーテベル城の牢屋というわけだ。と、ここまでいえばもうすでにみなさんご理解していただけていると思います。俺が胸をもんだ彼女は、この城の王女様、ユリス「カーテベルさんなのでした。

これなんてエロゲ？

異世界にきて最初に会った女の人が、王女様だけ。これもう絶対むこう俺に恋してる感じだろ。

だから、俺は今生きている。憧れのエロゲの主人公になれたんだ。これで、あとユリスさんの専属メイドとか出てきたら、最高だね。俺個人としては年上希望。

で、話を戻すけど、このガイアって世界には、魔王がいるってことだったじゃないですか。そいつを俺が倒さないといけないんだけど、今その魔王はこのガイアを5割ほど支配してるらしいんだよね。いつ現れて、どんな名前なのかも、看守さんは知らないらしいけど、そういう事を勉強してるひとは、知ってるらしい。なんか魔王について研究してる人がたくさんいるらしいよ。

さすがに、人間側としてもなにもしていないわけにはいかないから、いろんな国から騎士団を出して、交戦してるらしいけど、少しずつだけとおされてきているらしい。

とここまでが、俺が看守さんから聞いた情報。

「でも、どーすっかなあ。」

俺は今捕まえられていて、魔王を倒しようにも何もできない。

「おい、勇者様（笑）ユリス様がお呼びだ」

ちなみに、勇者様（笑）とは俺の事だ。こうなったのも、俺がユリスさんに、俺は勇者だとか名乗っていなかったせいでもあるんだが、ちょっとどころではない恥ずかしさがある。だが、今はそんなことより、ユリスさんが呼んでいるという事が大事だ。

「あいよー」

「お身体の方はもう大丈夫で？」

「あ、はい、もう大丈夫です。」

ちなみに俺が今話しているのは、ユリスさんではなくユリスさんの専属メイドをやっているアリス「カーテルさんだ。すこし大人びた感じのする、まさに俺のタイプな人だ。年上のメイド……やっぱエロゲなんじゃね？」

「よかったです。ユリス様も、お気になされたようなので。」

「あ、そうなんですか。」

以外だ……。正直、「不埒者を成敗してやりました」的な感じで清々しているんだとばかり思ってたが、根はいい人なんだな。

「ここです。」

少しとはお世辞にも言えない距離を歩いて、やっと目的地に着いたようだ。この城どんだけ広いんだよ。

「中で、ユリス様がお待ちです。」

「はい。」

俺はこれまた、どでかい扉を開け、中に入った。

「ユリス様、勇者様（笑）を連れてきました。」

あんたもか！

「ありがとう、アリス。下がっていいわ。」

「はい。」

そういつて、アリスさんは、奥の方へ消えていった。

「あの〜「既にご存じかも知れませんが、名乗っておきますね。私の名はユリス」カーテベルです。」

かぶせてきやがった。なんて小さいことをしてくるんだ。

「えっと、なんで俺を呼んだんですか？」

「質問するよりも、名乗る方が先だと思いますが？まさか、勇者が本名では、ないでしょう。」

そんな名前でたまるか。

「あ、すみません。え〜と、桜舞希です。」

「サクラ」マイキ？変わった名ですね。」

俺からしたら、あんたの方が変わってるけどな、とはいわず、はあと言っておいた。

「では、サクラと呼ばばいいのですか？」

「いや、マイキをお願いします。」

なんか、桜だと、女の子っぽいから昔からいやだったんだよな。

「そうですか、では……マイキ。」

「はい、なんででしょうか？」

なにを改まっているのだろうか……。

「その……これから行く先なんてのは決めてますか？」

「は？なにここに住ませてもらえんの？」

なんとという急展開。いきなり高感度MAXですか？どんなイージーモードですか？このエロゲ。

「いや、別に私としてはどうでもいいんですけど、お父様が妙に貴方を気にいってしまったって、その……うちではたいてもらおうって……。」

「え、でも俺がここに住むのってユリスさんは嫌じゃないんですか？」

なんてったって、胸をもまれてるからな……俺に。

「嫌か嫌じゃないかでいうと、1000億%嫌ですが、お父様の事ですから何か考えがあるのでしよう。その辺は我慢しますわ。」

我慢って……。俺は害ですか？そうですか、そうですね。

「そうですか、ユリス様がそこまで俺と住みたいというんなら、ここで働かせてもらいます。」

そ、そんなこと言ってないですわって顔真っ赤にして言ってくれると思ってたが。

「あ、そうですね、残念ですがそういうことでしたっけ。はたらいってくださいね」

と全く感情のない声で返されてしまった。ポケ殺しってつらい。

「ところで働くってなにをすればいいんですか？」

ちなみに、俺は一人暮らしだったこともあるから、常人よりかは、遥かに自信がある。

「では、その庭でも掃いていてください。」

「まあ、そんなとこだらうとは思ったよ。」

最初の仕事は、庭の掃き掃除だ。これをちゃんとこなせば、もっとましな仕事をさせてもらえるかも……。何気に、家事がけっこう好きな俺だけど、庭を掃いたりするのは、あまり好きではない。さっさと終わらせるに尽きる。

俺は箒とチリトリを持って、庭にいった。（アリスさんに案内してもらった）

いつになったら、魔王を倒しに行くんだろう、俺。

第3話 勇者様(笑)(後書き)

ご感想・ご意見・各種批評・間違いの御指摘などをありましたら、コメントお願いします。

第4話 これはひどい

「な、なんなんだここは……。」

カーテベル城の庭の掃除を任された俺なのだが、早くから挫折しそうだ……。

あまりにも、庭が広い。木も生い茂っていて、なかなか手入れはされていて、ゴミがあるとかいうわけではないのだが、これを一人で掃除するのは無理だ。

ちなみに、ここの掃除が終わるまではご飯抜きらしい。死ぬわ！
だが、なにもしないままでは本当になにも進まない。とりあえずなにかすつか。

「まず落ち葉を片づけるか……。」

といっても落ち葉を拾うくらいしか、庭の掃除って思いつかない。

そこそこ手際よく作業は進んだ。最後まで、とはいかなかったけど、だいたい半分は終わったんじゃないだろうか……。最初は絶対おわんねーだろ、と思っていたが、5時間でこれだけ進んだんだから、明日は、きつと楽勝だろう。

「にしても、暗いな。」

ちょっと熱中しすぎてて、もうすで真っ暗だ。奥の方まで来たから、城まで遠い……。

「あーだるい。」

正直歩きたくない。早く寝たい。

「もしかして、本当にご飯抜きじゃないだろうな……。」

今日かなりエネルギー使ったから、そんなことになったら革命を起こすぞ。

「お疲れ様です。」

「あ、どうも。」

城の近くまでくると、アリスさんが出迎えてくれた。

「庭掃除は順調ですか？」

「はい、この調子だと、明日には終わりそうです。」

「そうですか。では、お風呂にでも入っててください。着物はこちらで用意させますので。」

「あ、はい。ありがとうございます。」

では、といってアリスさんはすたすたと歩いて行った。お言葉に甘えて、風呂にでも入らせてもらおう。

「ふー、いい湯だった。」

働く人用の風呂なんだろうけど、それでも十分広く、とてもリラックスのできる空間だった。しかも驚いたことに、風呂は、メイド用、コック用、騎士用等、さまざまな人用にあった。やっぱこんな広いと、働いている人の数もすんごいだろうな。

「えーと、ここを右か。」

服と一緒に、紙切れがあった。その紙には、おれの部屋までの道順を書いてあった。なんて気がきくんだ、アリスさん。そして、部屋まで用意してくれた、ユリスさん（かお父さん）には感謝しないといけないな。これからは、ちゃんとした態度で接さないとな……。

「おーここか。」

俺が行きついた先は、けっこう隅っこの方にある、小さな扉の前だった。

「まあ、贅沢はいつてらんねえよな。」

少し期待してたのを反省し、俺は扉を開けた。

「は？」

そこに広がったのは、今にも足が壊れそうなベットに、薄汚れたシート、後は壁に広がるなぞの染み。そして謎の腐臭がする袋×約30

「……これはひどい。」

ベットもシートも染みもまだ許せる。住ませてもらうんだ（多分無料で）。そんなことで、文句を言ったりしないが、これはあまりにもひどいじゃないでしょうか、ユリスさん。

「片づけないと寝られない……。」

まず、この臭い袋（中はパンパンまでつめこめられた生ゴミ）をどうにかししないと……。

「とりあえず、ここからだすか。」

「ふう。つかれた。」

一旦部屋の前に置いておくことにした。幸い近くに人の部屋はないみたいだし。

「後は、これをどうするかだな。」

さつき掃除をして分かったけど、ゴミ捨て場ってここから遠いんだよね。

正直だるいけど、明日の朝に早起きして捨てに行こう。今行くと他の人に迷惑かかるからな。

そんなことより、今最も気になるのは

「本当にご飯抜きなのだろうか。」

ということだ。腹減ったな！。

なんとなく、アリスさんが書いてくれたであろう地図を眺めてたら、

裏面に文字が書いてあった。

「え〜なになに？お部屋に着きましたら、ご飯の用意が来てますので、風呂場の前にある食堂まで来てください。」

……いやっほつい。飯食えるじゃん。最高だぜアリスさん……ん？確か俺は袋の処理をしてて、もう時間がだいぶ経ってるような……。

「やつべー。」

もしかしたら、待つてくれるかもしれない。悪いことしたなと思いつつも全力で目的地を目指す。

「ハアハア、ここか。」

とりあえず、食堂まではダッシュで来た。おかげで余計に腹減った。中を確認してもアリスさんはいないようだ。

「よかった。待たせてはいなかったみたいだな。」

まあこの奥では少し残念だとおもっている自分もいるわけだけど。俺は一人で『マイキさん』と張り紙があった席に座り、独りでご飯食べた。

おいしかった。うん、おいしかった。

「うわーくっせー。」

正直言って、俺の部屋はまだ臭い。今日はこんなところで寝るのか

……。
こんなところで寝れるのか心配だったが、やっぱり疲れていたのだろう。ベットに寝転ぶとすぐに意識がなくなってしまった。

「これで最後か……。」

なんとか睡魔に打ち勝ち、俺は他の人たちより早く起きることが出来た。と思えるほど早起したのだが、なんとすでに、ほとんどの人が起きていた。

だが、幸い途中で会うことはなく、少し話声や、仕事をしている音が聞こえるだけだ。

「なんか、臭わない？」

「ホントだ、なんだこの臭い。」

ごめんなさい、俺の抱えてるゴミ（と臭い部屋で寝てた俺。）
部屋はドアを開けっ放しで寝たので大分臭くなくなっていた。もしかしたら、俺の嗅覚がだめになったのかもしれないけど。

「ふう、おしまいっと。」

最後の一袋を、ゴミ捨て場に置き、俺はもう一度部屋に戻って寝た。疲れは完璧には取れてはいなかった。

「ZZZZ」

寝ている俺には、部屋に近づいている者の気配も足音も聞こえはしなかった。

第5話 武器を手に入れた。

「ー。ー。」

なにをいつてるんだ？疲れてるんだから後にしてくれ。

俺の心の声とは裏腹に誰かの声は大きくなっている。

「マイ。マイキ！」

この声はユリスさんの声だ。王女様なのに、こんなに怒鳴っているのだろうか。王女様ってのはもっとうとう上品に、口元に手を当てて、「おほほ」といつてるようなイメージなんだけど。

「はいはい、ただいま。」

流石にいつまでも待たせておくわけにはいかないから、ベットから起き上がり、ドアを開けた。

「おそいですよ！何をしてたのですか！？レディーを待たせるなんて、信じられません。」

レディー？とは口に出さずに、すみませんとあやまっておく。

「ところで、何しに来たんですか？王女様ってこんなところにくるほど暇なんですか？」

「グッ、べつに暇なわけではないのですが、その、きれいに部屋を扱っているかチェックを……。」

「それなら、アリスさんに頼めばいいんじゃないんですか？」

「……なんだか、私に会いたくなかったような言い草ですね。」

「いや、そんなことはありませんよ。」

「どっちですか!？」

おっと、ちょっと昨日の仕返ししてやるつもりだったがついやり過ぎてしまったかもしれない。ユリスさんはすっかり憤慨していた。

「で、どうですか、俺の部屋は？合格ですか？」

「合格？このゴミ袋だらけの部屋が？」

と、俺の後ろの部屋の中をひよいと覗き込むユリスさん。なるほど、いちやもんつけにきたのか。だが、しかし……。

「!」

「どこにゴミ袋があるんですか？ユリスさん？（笑）」

そう、俺はあのいやがらせのように大量に置かれていたゴミ袋をすべて処分したのだ。我ながら頑張った。

「え？あ……その、すいません、私の見間違いでした。」

すぐく悔しそうなこの顔。バカにしようとして来てみたら、逆バカにされてしまったこのなんともいえぬ顔。今にも、ギギギと音が聞こえてきそつだ。

「そうですね、よかったです。」

おれは、すごく爽やかな笑顔で答えた。いやーすがすがしいなあー。この、強気でわがままそうな、女王様が、顔を真っ赤にして俺を見ているのだ。是非想像してほしい。

「では、私は用事がありますので。」

とても、悔しそうにそう言い捨てて、この場を去っていくユリスさん。その姿を俺は、さっきと同じ爽やかな笑顔で見送ったのだ。

「さてっと。」

先ほど朝ごはんを食べてきた俺は、部屋に戻り俺がこの世界に来た時に身に着けていた服（学校の制服）とそばに置いてあった剣を手にとった。正直この剣の存在には、さっき気付いた。ユリスさんがおいていったのかと思っただが、ユリスさんは部屋に入っただけではない。とすると、これはもしかしてラファエルからの、贈り物か？

「それにしても軽いな。」

思っていたよりも、剣は軽かった。ていうか、これ学生服の分の重みぐらいしか感じられない。

「まさか？」

試しに剣だけを持ってみたが、全く重さを感じない。すげー

「すげー。」

ちよつと軽く振りまわしてみる。

『ブン、ブン』

……けっこういい線いってんじゃね？

いや、他の人が使ってるのなんて、ユリスさんのぐらいしか見てないし、正直なところはよくわからないが、けっこう手になじむ。

「一応これをもっていようかな。」

今から掃除なんだけど、重さも感じないし、護身用もっていいつう。

「そついや、魔法とかもこの世界にはあるんだよなー。」

俺は庭に向かいながら、考え事をしていた。

正直、魔法の事なんてほとんど分からない。分かっているのは、俺の属性は光って事位だ。

庭の掃除が終わったら、書庫室でしてみよう。こんなに広いんだから、そついう感じの部屋があるだろう。

「……つーか書庫室ってどこにあるのだから？」

また、アリスさんのお世話になるのか？ 勇気を出して、他のメイドさんに声をかけてみようか。

と、考えを整理して、また新しい疑問が浮かぶ。

「そついや、特殊能力ってなんなんだろうな。」

別に身体能力が上がってることに意外に、変わったことはなかったような。しいていえば、剣の重さを感じなかったことかな。ん？

「もしかして、あれが俺の特殊能力なのか？」

物の重さを感じなくする？いや、服の重さは確かに感じたから、武器の重さを感じなくする能力か！？

まだ確信はできないが、おそらくそんな感じの能力なのだろう。もしかしたら、ラファエルが特殊な剣をれにくただけかもしれないし……。

「なにはともあれ、この剣とは、長い付き合いになりそうだな。」

腰にかけてある剣を眺めて、俺はこの剣を大事にしようと思った。その時、一瞬だが剣が光ったような気がした。

「？」

見間違いだろうか、試しに剣を握って、素振りしてみると、かなり気持ち良かった。空気抵抗をほぼ感じずに振りきれ、この風切り音がすがすがしい。

「す、すげえ。」

なんだか、これなら魔王でも倒せそうな気さえする。そんなに甘いものじゃないとは分かっているのだが、そう感じてしまうほど、この剣は使いやすかった。だが、俺は剣術なんてものは知らないし、まだまだへっぴこなんだろう。だが、この剣と一緒になら、強くなれる気がした。

「一旦剣をしまい、また庭へ歩き始める。

「なんか、楽しみだな。」

はやく剣を使ってみたくて仕方がない。

そんなことを考えているうちに、庭に着いたようだ。

「さあて、さっさとおわらせるか。」

第5話 武器を手に入れた。(後書き)

少しみじかくなりましたが、ようやく武器を手に入れました。そろそろ戦わせないと……。

ご意見、ご感想、誤字脱字の報告などお願いします。

第6話 学ばないカ？

掃除も終わり俺は書庫室に（アリスさんに案内してもらって）来ていた。

とりあえずはここで、少しお勉強しておこうかと思つ。

「んあーもうこんな時間が……。」

少し集中し過ぎて、時間を忘れてしまっていた。もうあたりは真っ暗だ。

「腹減つたな……。」

とりあえず呼んでいた本を元に戻そうとして、アリスさんに言われたことを思い出した

（読みたい本があれば、自由に持って行ってもらうてかまいませんよ）

「うーん、どうしようかなあ。」

俺はこの本を自分の部屋に持って帰るか少し迷った。だが、結局

「持って帰るかな。」

持って帰っても読まない可能性があるからな。まあでも一応ってこ

とで。

「やっぱ遠いよなあ。」

書庫室から食堂までかなりの道のりがある。やっぱ城だからなあ。

正直広くてめんどくさい。

とりあえず、今日調べたことを整理してみるか……。

まず魔法についてだ。

自分もっている魔力を使い、敵に攻撃する方法のことを魔法というらしい。

魔法を使う上で大切なのは、自分がどれくらいの魔力をもっているかということだ。

人によって、持っている魔力の量は決まっている。

魔力はたくさんもっている人もいれば持っていない人もいる。そのため、魔法を使えない人間ももちろんいるし、使っても一回限りな人なんてのもたくさんいる。

これは努力ではどうにもならず、まさに才能があるかないかで別れてしまう。

また魔力は使えば使うほど、運動能力に支障がでてしまう。

たとえば魔力が100ある人間が10の魔力を使う魔法を使っても平気だが、そのあとに80の魔力を使う魔法をつかうと、まず支えなしでは立つてはいられなくなる。

基本的には自分の持っている魔力の半分をすぎると、すこしだるくなってくる。

そして自分の限界を超えてしまった場合に起きる、暴走状態。人は魔力で動いているといっても過言ではない。その魔力も少しくらいなら1日2日で元に戻るのだが、自分の限界を超えてしまうと、つまり己の力量異常のものをつかう、あるいは何度も何度も魔法をつか

いすぎる場合には、魔力が無くなってしまい、体が自然に魔力を求めていく。わずかながら、草や木などにも魔力が込められており、それらを自分の体に取り込んでいく。しかし、人には決められた量の魔力しか入ることができない。そのため、魔力をほとんど取りこんでいくと、空気を入れ過ぎた風船のように簡単ににはじけ飛ぶ。また、暴走状態中は、自我を失い、近くのを壊してまわる獣になっってしまう。そういった事が起きないように、作られたアイテムがある。魔法学の第一人者ガース教授の開発した、封印の腕輪だ。この腕輪はしている状態で、魔力を使い続けることはできない。この腕輪が装備者の魔力がどれくらい残っているのかを感知し、暴走状態になる決定的な魔法を使う前に、特殊な針が肌をさし、気絶させるからだ。これが開発されてからは、暴走状態になる人間は、ほぼ0となった。また、魔法を使う物場合はこの腕輪をつけなければならぬという義務がある。それを破ったものは、家族がまとめて処刑されるとい法律まである。

ということである。

まだきちんと最後まで調べきれていないが、だいたいの事はつかんだ気がする。

ただ、自分の魔力はどうやったたらわかるのか、魔法を使う際の呪文とかはどんなのかとはまだわからない。

と頭の中を整理しているうちに食堂に着いた。

「まだ、残ってるかな？」

いろんなところを探してみるが、なかなか見当たらない……。

「まさか、もう残飯にしまったのか……。」

「いえ、ここに置いてありますよ。」

「っ！アリスさん！」

全く気付かなかったけど奥の方にアリスさんがいた。そのままアリスさんは俺のところまで料理をもってきてくれた。

「ありがとうございます。」

俺がそういうと、アリスさんは少しだけ微笑ん出くれた気がする。すこしうれしくなって、俺はあることを聞いてみた。

「もしかして、待っていていたんですか？」

そうだったらうれしいな〜とか思っちゃうけど、多分たまたまいただけだろう。

「いえ、ユリス様の紅茶を作りにきていただけです。」

「そうですか。」

わかってたから、別にショックじゃねーし。……ショックじゃねーし。

そのまま、アリスさんと少し話をしながら飯をたいらげた俺は、部屋に戻ることにした。

「じゃあ俺帰るんで、おやすみなさい。」

「はい、ごゆっくりお休みください、マイキさん。」

部屋に着いてから、アリスさんに魔力の測り方とか聞いておけばよかったなーとかおもったけど後の祭り。明日聞くことにしよう。とかなんたら考えているとなにかが近づいてくる音がする。

「……なんだ？」

不気味な足音だ。ゆっくり俺の部屋に近づいてくる気がする。こえーよ。

俺は一応、武器を手に取り、カタカタ震えながら、何者かがくるかもしれないという恐怖と闘っていた。

「（こないでください。こないでください。こないでください。）」
俺の必死の願いもかなわず。不気味な足音は俺の部屋の前でとまり、ドアが少しずつ開いていく。

「あばばばばばんりつばば。」

そして、ドアが完全に開いた。

第6話 学ばない力？（後書き）

かなり更新が遅れました。すみません。

間違いのご指摘、感想などありましたら、コメントしてください。

第7話 謎の男

ドアが開き、目の前に現れた謎の男は見た感じ、屈強そうで、鎧を身にまとっていた。年は恐らく30前後だろう。鼻の下にりりしく髭が生えそろっている。

「お前がサクラか？」

男は俺の名前を呼ぶと俺の返事を待たずに、腰の鞘から剣を抜いた。真剣です。

「あ、あ、あんたはだれなんだよ!？」

恐怖で声が裏返ってしまったが、ちゃんと通じたようで、返事は帰ってきた。

「お前に名乗る必要はない。」

いいながら男は剣を構えた。俺はと言うと恐怖で脚がすくんで動けないでいる。ユリスさんの時は動くことが出来たのに、なぜか脚は俺の言うことを聞いてはくれなかった。握っている、この剣も、動けないんじゃない宝の持ち腐れと言うやつだ。

「早く構えろ。」

どうやら、この男は俺が構えるのを待っていたようだ。こんな夜遅くに押し掛けてきておいて、いまさら作法とか気にされても困るんですけど。とか思いつつも俺も剣を構えた。剣に相変わらず重さは感じない。

「ふん、やつと構えたか。では…。」

一拍置いてから、男は俺に飛びかかってきた。俺と男の距離およそ5m。しかしその間合いは一瞬で詰められた。

「はい!？」

やばいと思っても足がすくんで動けない。人生で3度目の死を覚悟した俺だが、俺の体が真つ二つになることはなかった。

「なぜ動かない？」

「え？」

俺が回避しようとしないうちに違和感を感じたのか、男は剣を止めていた。

「なぜ動かない？」

二度聞いてきた。だが、俺は答えることができない。こんなときに何と言えればいいのか？足がすくんで動けませんでしたなんて言ったら、速攻で殺されしまうだろう。

「あんたから殺気を感じなかったからかな。」

なんていってますが、内心ビビりまくりです。

「おもしろい。」

そういつて男は一步で間合いを離れた。

「先刻の一撃は小手調べのつもりだが、そこまで見抜かれていたとはな。」

なんか適当にほら吹いてみたけど、過大評価されたみたいだ。もしかしなくてもこれはまずいんでね？

恐らく、この男はかなり強い。見た感じ、剣が恋人です、みたいな感じだ。

「では、次からは本気でいかせてもらう。」

男の斬激がくる。なんとか極限の緊張状態からは抜けられた。体が動く。

向かってくる男の剣を、俺の剣で受け止める。しかし、相手の力は俺のそれを大きく上回っており、つば競り合いにもなりはしない。俺のガードなんてないかのように向かってくる斬激を避けるため、真横に飛びのく。だが

「甘いわ!?!」

ほぼ垂直に向きを変え正確に飛びのいた俺に向かってくる。片手持ちに相手は切り替えたため威力は下がっているはずだ。これなら受け止められる。

「っ!」

考えが甘かった。片手でも男は充分俺より力が強い。ガードしたはずのに俺は吹っ飛ばされた。そのまま背中から壁にぶつかり、呼吸

が出来なくなる。

「ぐふつ。」

息ができない。だからといって、動かないわけにはいかない。閉じていた眼を開け男を探そうとするが、俺の目の前には男が構えている剣があった。

「な！」

「こんなものなのかお前の力は？」

全然太刀打ちできなかった。俺はここに何をしに来たんだ。魔王を倒しにきたんだろ。人間に負けてるのに、そんな奴が魔王に勝てるのか。

……このままでは、帰ることが出来ない。別に楽しいことばかりではなかったけど、俺の帰る場所はあるんだ。こんなところでくじけている場合じゃない。

剣を握る手にもう一度力がこもる。やるしかない、やらないといけないという気持ちになれる。

「こんなところでは終われない。」

気がつく俺の体が発光していた。俺の体内にある魔力が反応しているのだろうか？いまならなんでもできる気がする。

「な、なんだ！？」

男は驚きもう一度間合いをとった。俺の発光はとまったが、これなら勝てるという自信ができた。

「こつちからいくぞおお!!」

俺は男がひるんでいるうちに速攻をしかけた。

男は左手に剣を握っている。なので右腕を狙い、全力で剣をふるつ。

「ぬう!!」

しかし、相手の反応のほうが一步速かった。腰にあるもう一本の剣を男は抜きそれで応戦した。

「くそつ。やっぱ二刀流か!!」

男の腰には二本の鞘があった。多分そうだろうとは思っていたが、これは分が悪い。

「いまのはすこし危なかったが、もう二度目はないぞ。」

奇襲作戦は失敗に終わった。ならば実力で勝つしかない。

身体能力の底上げと魔力による補助のおかげで何とか、男とも片手ならつば競り合いができるようになった。恐ろしい男だ。

「くつ!!なんてやるつだ!!」

「わるいが、俺は二本の剣をもっているんだぞ。」

そんなことは分かっている。二本目の剣が来る前に俺は、一度剣をひき体制を整えようとしたが、すぐうしろは壁だった。

「な!？」

後ろに下がれない。なんとかしゃがんで、避けた俺だが、顔を上げる前に、回し蹴りが飛んできた。

こいつ…、剣だけではなく体術の方もつええ。

意識が朦朧とするが、なんとか耐え、次の攻撃に備える。

「そろそろ終わりにしよう。」

男はそういいながら、剣を構える。本気の一撃が飛んでくるだろう。俺もいまだせる精いっぱい攻撃をしかけるしかない。

「ハアアア！」

俺は防御をすて、捨て身で男に一字に切りかかる。

男は、俺の攻撃を一本の剣でうけとめ、もう片方の剣で切りかかる。俺は即座に剣から手を離し、拳で相手の剣をおもいつき殴る。すると男の剣はそれで、俺には当たらなかった。だが、それに一瞬驚きながらも、すぐに男は鐔の部分で俺の首の後ろを叩いた。

「あっ！」

漫画とかでよくある攻撃だったけど、俺はよけることができず、意識が遠のいていく。

「……………」

男がなにかをいったが何をいったかは俺には分からなかった。そのまま俺は意識を手放した。

第7話 謎の男（後書き）

更新がまたしても遅れました。すみません。

ご意見などございましたらコメントの方よろしくお願いします。

第8話 その男 騎士団長(前書き)

正直いってなんも思いつきません。

第8話 その男 騎士団長

「今までのあらすじ」

おつすオラ桜舞希。16歳の高校1年生だ。

世界を救い再び元の世界で生きるために異世界にやってきた俺。

でも、いきなり王女様の胸をмонでしまったり、なぞの男に殺された(?)りした。

……え？俺死んじゃったの？

……なんだこれ？俺は殺されたのか？殺されるってなんだ？なにもわからない。なにも思い出せない。

「なにを間抜けな顔をしている。」

……人がせつかくシリアスな空気を作り出そうとしているのにさ、まあ厨二設定だったけどさ。

それでも真面目な顔しているつもりだったのに、間抜けな顔って……。ってことは俺は戦う時とかも間抜けな顔してんの！？うっわ恥ずかし。これから戦うの戸惑うくらい恥ずかしいよ。

俺が一人で赤面していると、あの謎の男…ゴリア=エルジさんが、なんか語りだした。

「さつきも言うたが、俺がお前の教育係になったからには、お前には一流の漢になってもらう。」

そう、なんか俺に襲いかかってきたこのゴリラみたいな名前のおっ

さん（口に出したらすごく怒る）はユリスさんに俺の性根を叩き直してこいといわれ、俺の性根を叩き直すらしい。ていうか正直、ユリスさんの方が性格捻じ曲がってると思うんですけど！？絶対歪んでるだろあの人の方が！？

「一流の漢ですか…。」

「そつだ。」

正直一流の漢がなんなのかわかんないけど、強くしてもらえるんかな？ならこつちも乗れるってもんだが、正直このゴリアさんって人怖いんだよね。ていうか剣術とかの前に、心の修行だ！とかいつて凄いいことさせられそうなんだけど。ていうかこの馬車でどこに向かおうとしているのか。

「それは、具体的に何をしますか？」

「ふん。」

あれ？ここは無視するんだ。けつこつ大事じゃない？何をするかわからないって怖いんですけど。なんかもう超帰りたいたいんだけど。

そうそう、この人、俺がユリスさんの胸をもんだこと知ってんだよね。だからけつこつ俺に敵意を持つてるっばいっす。あのことを知ってる人はかなり限られてるわけだけど、それを知ってるってことはこの人はけつこつ偉い人らしいです。どんな役職か気になるな。

「ゴリ」…ゴリアさんは城ではどんな仕事をしているんですか？」

「……騎士団長をしている。いや、正確にはしていただな。今は、現場の指揮には代わりの者がいつているしな。騎士団長なんて名は

かりだ。」

「へ、へえ〜。でもすごいですね。騎士団長なんて。だからあんなに強いんですね。」

「…お前が弱いだけだ。」

「あ、そうですか。」

なんなんだよ、この人。俺は褒めてんのに、なんで俺をけなしでくんの！？辛いよ！この二人きりの空間で相手から敵意向けられて、険悪なムードになるの。
ていうか、結局今は何をしているのか、全くわからなかったぞ。

「ついたぞ」

「あ、はい。」

「……早く降りろ。」

「…はい。」

ちよつともたついただけで、そんなに怒らなくてもいいじゃないですかね。心が折れそうです。

「ここで、お前が俺の教育もとい訓練についてこられるかどうかを見定める。」

ついた先にあつたのは、古びた建物だった。城はあんなに豪華なのに、ここはなんの飾り気もなく、ただただこじんまりとしている。どうやらここで俺を品定めするらしい。

「今から、俺はお前に質問する。それにお前は答える。」

「え？あ、はい。」

正直、それぐらいなら馬車の中でやればいいじゃんと思ったが、なにか空気が変わった。なにかふざけられない。学校の先生に怒られていて質問されているような感じだ。

「お前は、強くなりたいか？」

強くなりたいか、か。そんなの決まってるだろ。

「はい。強くなりたいです。」

強くならないといけない。ゴリアさんと戦ったときに、自分の弱さが身にしみてわかった。こんなのじゃ、魔王を倒すなんて夢のまた夢だ。

「そうか……。ではお前はなぜ強くなりたい？」

なぜ強くなりたい……。それは、

「……………自分の為です。」

「…自分の為とは？」

「自分の身を守るためです。そして・・・」

「そして？」

「……魔王を倒すためです。」

「……笑われるかもしれない。お前がか！？アホじゃないのか？と馬鹿にされるかもしれない。それでも、俺の目標はそこだから。笑われようが、馬鹿にされようが、揺らぐことはない。」

「魔王を倒す……か。」

しかし、ゴリアさんはなににか考え込むような様子で、眉間にシワを寄せていた。

「……では、強いとはなんだ？」

強いとはなにか……？

「それは、力が強かったり、勝負に勝つこととかですかね？」

疑問に疑問で答えてしまった。それでいいのか本当にわからなくなる。

「……ふむ、そうか。」

なにやら、これで質問は終わりのようだ。重たい空気が解かれた。空気がこんなにおいしいなんて、気がつかなかった。うめえこの空

気。さっきまでの空気のせいでテンションがおかしくなっているよ
ころにゴリアさんが言い放った。

「お前は不合格だ！」

第8話 その男 騎士団長（後書き）

ご感想・ご意見・各種批評・間違いの御指摘などありましたら、コメントお願いします。

第9話 飯抜きってなんですか？

「お前は不合格だ！」

フゴウカク？おれが？

俺はなにをしてたんだっけ？確か強くなるためにゴリアさんが教育してくれるって話だったけど、なぜか質問されて、不合格？質問だけで教育もとい訓練に付いていけるかが分かったのだろうか？そうだとしても納得できない。

「なんで不合格なんですか？」

わからない。さっきまでそこまでやる気はなかったけど、なんだかこうしてお前はダメだという風にいわれると、やりたくなってきた。

「どうして強くなりたいのかを俺が聞いただろう。そのときお前は『自分のためです。』と答えたな。そして魔王を倒すと。」

「え、ええ」

たしかにそう言った、。それがいけなかったのだろうか？でも今の俺にそれ以外に強くなる理由はない。元の世界にもどるためには魔王を倒さなくてはいけなくて、魔王を倒すためには強くないといけないわけで……。

「このことについては、正直言って驚いた。今の世の中に魔王を倒すとかいう男がまだいたとは。いや、別に悪い意味ではない。むしろ目標を持つというのは良いことだ。だが、お前のいう強さはあまりにも弱い。確かに力が強いことや勝負に勝つものも強いと言えな

いわけではないが、そういう肉体的なものではなく、どんな困難にも立ち向かうこと、あきらめずに戦い続ける心の強さを持っているものこそ、本当の強き者であるといえる。」

正直、綺麗事だと思った。たとえば、どんなことにも立ち向かい、あきらめない体の弱い男が、ムキムキマツチヨに勝てる訳がないように、肉体的な強さが一番必要だ。それを土台とし、自信として、立ち向かう勇気をもち、あきらめない心が付いてくるというものではないのだろうか？

「一歩踏み出すというのは、確かに不安もあるだろうし、勇気もいる。だが困難に立ち向かわないと、まず強くはなれない。どんなに大変であろうとそれが自分にとって大切なことならば、挑戦するべきだ。挑戦してみなくてはなにも得ることはできないのだ。そしてあきらめないということ。どんなに素晴らしいことをしていたとしても、途中で投げ出してしまったら、なんの価値もない。全てが台無しになってしまう。時間も、それまでの努力も。」

……。確かにそれはあるかもしれない。最初から強い人間などいない。努力して努力を重ね、やっと人間は強くなれる。だが、それは並大抵の、気持ちでは、踏み込めないばしょにある。そして、もうやめたいと思うこともあるだろう。だがそこで諦めずに進むから先に行ける。そうして、挑戦することを覚え、諦めずにつづける精神を定着させることで、自然とつよさというのは付いてくるということだろう。俺が考えていた事とは全くの正反対の考え方だ。凡人の俺には、やっぱりゴリアさんの言ってることの方が正しいと思えてくる。こういう気持ちを持っていたからこそ、今のゴリアさんがあるのだろう。正直言って眩しかった。いつも俺は挑戦することからさけ、最後には諦めるという生き方をしていた。そんな生き方も悪くはないだろう。でも、今ゴリアさんの考えを聞いて、俺はそうい

う風に生きてみたいと思った。正直かつこよかった。挑戦する、あきらめない、口で言うのは簡単だが、行動として示すことができる人間は少ないだろう。

心の強さ、まずは挑戦してみることから始めよう。

「ゴリアさん……。」

「なんだ？」

もう言いたいことはいったという顔つきをしている。

「俺、分かった気がします。ゴリアさんが言いたかったこと。」

「……そうか。……ふむそのようだな。さっきとは目付きが変わった。」

ゴリアさんが俺の目を見つめそう言った。少しだけ認められた気がした。でも気がただけじゃダメだ。完全に認めてもらう。

「で、お前はどうしたいんだ？」

ゴリアさんの質問に俺は、間髪いれずにこう答えた。

「強くなりたいんです！！お願いしますゴリアさん！！！！」

俺は頭をさげ、そう叫んだ。いままで意識的に出した声のなかでは一番とも言える声の大きさだったと思う。

もしこれでダメだとしても、俺はあきらめない。もう諦めたりはしたくない。中途半端にのほほんといきるのではなく、男らしく胸をはって生きられるように。

「わかったか？」

「あ、はい。」

怖いんだけど。ゴリアさんの眼、ちょー怖いんだけど。

「ふむ。行動を共にするだけではだめだな。……よし。俺がちょっとした訓練をしてやる。」

むしろ訓練だけでいいです。行動を共にするはいらないです。

「少しまっている。」

そういつて、ゴリアさんは奥の方へ消えていった。

30分後

俺の目の前には、物干し竿のようなものから、糸が垂れてきて、糸の先にうっすい短冊のようなものがあった、ゴリア訓練第1段で使うであろう、アイテムが作られていた。

「なんですか？これ？」

するとゴリアさんは一本の剣をさし出して

「この紙をこの剣で切ってみる。」

といった。へ？こんなのでいいの？

「え？そんなんでいいんですか？楽勝ですよ。」

ゴリアさんから剣を受け取る、そして例のアイテムの前にいき剣をふる。

『へ。』

結果からいうと紙は切れなかった。紙は剣が巻き起こす風により、剣をよけるようにめくられてしまう。もう一度やってみる。

『へ。』

ダメだった。すると黙って見ていたゴリアさんが

「そんな振りじゃ駄目だ。ただひたすら早く剣を振ることだ。その程度の速さで切れるものなんて戦場にはないぞ」

そうはいわれても、俺的に最高速で振ったのにこの紙を切ることはできなかった。少しゴリアさんにお手本を見せてもらおう。

「すみません。一度やってみてくれませんか？」

おそろおそろ言ってみる。

「仕方ないな。一度だけだぞ。」

そういって、俺から剣を受け取ると、さっき俺が立っていた場所に移動し一振り。

「!」

動きが早すぎて、ほとんど見えなかった。前に戦ったときより全然。だけど、紙は微動だにしていな。

「あれ？紙は切れてないですよ。」

確かに、早かったけど、切れてないんじゃないや仕方がない。ちょっと笑いそうになったが、俺は驚愕の瞬間を眼にする。

「なにをいつている」

「!」

時間差で紙に線が入ったと思ったら、次の瞬間には、紙が裂け始め、地面に落ちていった。

「まあ、最低でもこのぐらいの速度は出してもらいたいな。」

ゴリアさんのドヤ顔。ホント、どやあって声が聞こえそう。でもそんなことが気にならないほど俺はびっくりしていた。これは俺の中でのゴリアさんをもっと格上と設定しないと。

「なにをポーとしている。早くやれ。」

いつのまにか、ゴリアさんから受け取っていた剣を強く握る。さっきのゴリアさんをイメージする。ゴリアさんを自分に置き換え、よし！いける。

「うおおおおー!!--!」

『へ』

……くっそー……。あたんねえー。

「はあ、それが切れるまで飯は抜きだからな。」

「え？」

「じゃあな。できたら呼んでくれ。」

「え？」

そのままゴリアさんは、またしても奥の方に消えていった。え？飯抜き？

なんかこの人ってなにかと飯抜きにしようとするよね。なんなの？
だけど文句言っても勝てる訳がない。今は言うことを聞いておくし
かない。そして強くなったら……。

「くひひ」

俺は、邪悪な野望を手に入れ、やる気を燃やしていた。俺ならでき
る。そう信じて、今はやるしかない。

「やってやるぜええ！！」

3時間後には泣きながら、飯をねだる俺がいた。

第9話 飯抜きってなんですか？（後書き）

久しぶりの投稿です。楽しみにしてた人なんていないとは思いますが、すみませんでした。でもまた次の投稿は遅れるかもです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4719/>

異世界で英雄

2011年8月9日04時29分発行